

## 序 文

私たちの言語生活は、今や完全にインターネット空間に軸足を移した観があります。ここ十年ほどでスマートフォンがすっかり普及し、SNSの利用率も全世代で高まっています。二〇二〇年からの新型コロナウイルスの感染拡大により、人々の直接的なコミュニケーションが減少し、会議や仲間同士のおしゃべりなどもコンピュータの画面越しに行うことが一般化しました。

こうした状況のもと、ネット空間では、ことばに関する情報発信や議論も盛んに行われていきます。ただ、その中には事実に基づかない説明や主張も多く、どれを信じていいか迷ってしまうという声もしばしば聞かれます。ことばに悩む人々に判断材料を示し、頼れる相談相手になりたい。そんな思いが、この『三省堂国語辞典 第八版』を編纂する大きな原動力になりました。

『三省堂国語辞典』は、一九六〇年の初版刊行以来、六十年以上にわたって支持を得てきました。金田一京助・金田一春彦・柴田武らの協力のもと、長く編纂の中心を担ったのが見坊豪紀でした。見坊は生涯をかけ、多くの媒体から約百四十五万例に及ぶ日本語の実例を採集しました。「辞書は『かがみ』（『第三版序文』参照）との信念に基づき、大量の実例を分析し、正確な地図を描くように、ありのままの日本語を記述しました。その姿勢はこの第八版にも引き継がれています。

この辞書は、第一にことばを映す“鏡”でありたいと考え、伝統的なことばはもとより、新語・新用法も積極的に収録しています。このことをとらえて、新語辞典か俗語辞典のようだという意見がありますが、事実とは異なります。現代語は、かたい文章語からくだけた俗語まで、さまざまなことば

によって成り立っています。そのすべてを見渡し、ゆがみのない姿を写し取ることを、この辞書は目指しています。この姿勢は、日本最初の近代的な国語辞典『言海』が「此書ハ、日本普通語ノ辞書ナリ」と宣言した、その精神とも通じるものです。

また、この辞書は、ことばを正す「鑑」でもありますが、新語・新用法を一概に誤用とは見なしません。このことについて、何でもありの態度だという意見がありますが、それも誤解です。世の中には確かな根拠のない誤用説が横行しています。この辞書はそうした説を安易に引き写すことはしません。そのことが現れ、広まった経緯を厳密に検討した上で、正式な場面で使いにくいものは俗語と表示し、注目されることばは発生や普及の年代も記します。このように、ことばを適切に使うための判断材料を示すことこそが「鑑」の役割だと考えます。

百科事典などに比べ、この辞書の説明はそっけないと言われることがあります。しかし、日々出会うことばの意味を知るために、そのつど詳しい説明を読んで要点を理解するのは、誰にとっても面倒なことです。この辞書では、小学校高学年から一般社会人までの利用者を想定し、分かりやすい日常語で「要するにどんな意味か」を説明します。たとえば、「わび（詫び）」「さび（寂）」の説明などは、一文で要点を明らかにし、類書と比べても分かりやすくなっているはずで、漢字も、中学校以上で習うものには読み仮名をつけ、中級程度以上の日本語学習者も読めるようにしています。



さらに、この第八版では、新たに以下のような情報を追加します（詳しくは「この辞書のきまり」や付録を見てください）。

一 **新規項目** 約三、五〇〇の新規項目を収録します。今を映す日常生活の用語を中心に、多くの

人が見聞きし、なおかつ、今後少なくとも十年は使われると判断したことばを選んでいます。

二 **アクセントの表示** 主として自立語（感動詞の一部を除く）に、現在広く用いられる代表的なアクセントを、一目で分かる記号で表示します。感動詞には音調を付す場合もあります。

三 **機能に応じた品詞認定** 「連語」を極力見直し、語の機能に応じて品詞を認定します。結果として動詞マス活用、形容詞ズ活用などの種類を新設します。自動詞・他動詞は新基準で示します。

四 **お役立ち情報**  **由来**  **区別** など、ことばの理解を深めるお役立ち情報の欄を設けます。年代に関する注など、さまざまな注記も「」に入れて示します。

五 **基本語の表示** コーパスの頻度などを踏まえつつ、最も基本的な一、〇〇〇項目（\*\*）、次に基本的な一、〇〇〇項目（\*）を表示します。国語教育や日本語教育で使うことができます。

今回の改訂にあたっては、利用者の方々から寄せられた多くの貴重なご意見を参考にしました。また、実際の作業では左記の方々のご協力を得ました。謹んで感謝申し上げます。

よりよい言語生活のためにこの辞書を役立てていただければ幸いです。

二〇二一年十月二十日

編者

執筆協力——阿保きみ枝・岩田久道・黒田直和・寺田智美・西部みちる・本多由美子

校正・編集協力——青山典裕・石沢香野子・稲川智樹・小笠原健士郎・岡本有子・兼古和昌・見坊行徳・

今野絵理・高橋夕香・田平知子・長坂亮子・穂満玲子・吉岡幸子

図版作成・提供——飯間浩明・高橋夕香・東京学芸大学附属図書館

送稿用データ作成——加地耕三・佐々木吾郎・高山隆嗣 編集担当——奥川健太郎











あおさ(赤コーナ)

あおさ(石専) ノリに似た海藻。あおさのり。食用調味料。アオサ(ペトナムのPeanut長い服) ペトナムの女性の民族衣装。上着は立ちえり、長そで、からだをびつたりと包み、長いすの左右に深いスリット(切れこみ)がある。下にスカパンをはく。

あおだ(田作り) あおだ(しょう) 青大将(あ) ハビの一種。緑色をおだた茶色で、長さメートル近くになる。毒はない。あおだけ(青竹) 青々とした竹。あおたけ。「一踏み(半分)に割た青竹を踏の足裏ツササジ」。

あおざかな(青色) 背が青みがかった銀色で身の赤い。食用のさかな。あおのり(例) アジ、イワシ、サンマ、サバ。

あおたん(青タン、アオタン) も北海道方言(俗) うちみによって「青い魚(あ)」。あおつ(ほ) 「青い魚(あ)」。あおた(一色) ②未熟な感じだ。「一ことを考える(一)株(一)」。あおてんじょう(青天井) ①青空を天井に見立てて言ふことば。野天(あ) ②どまも上がること。「株(一)」。あおな(青菜) 青い菜。なっぱ。●青菜に塩(あ) ものこがまくい。かすしよんほりした。あおにおにさい(青二才) 年が若く、まだ一人前になっていない男(悪口やけんそんの表現として使)。あおによし(青丹よし) (連体) (雅) 奈良(あ)にかるま(あ)のことば。

あおお(あお) ①青い地に白で、設計図や文字などをあわした写真。青図(雅) 青焼き。②計画家。老後の一。

あおのけ(仰のける) (他下) あおむける。あおのり(青海苔) 浅い海でとれる海藻。ほして食用にする。「焼きそば」をした木の葉。②(初夏)の若葉。

あおお(あお) ①青々とした木の葉。②(初夏)の若葉。あおび(かり) 青光り(名・目サ) 青っぽく光ること。「一のするさかな」。あおひ(青髭) ①ひげのちあが青々として色を塗る。②演劇ひげのそまををしめすため、顔に青色を塗る。あおひょうたん(青瓢箪) (俗) 顔色が青くてあおぶくれ。あおぶくれ(青膨れ) 顔色が青くてむくんでいる。あおぶさ(青房) すもも土俵の東北のすみに、つら屋根からたれた青いふさもと青柱のあった位置。

あおび(かり) 青光り(名・目サ) 青っぽく光ること。「一のするさかな」。あおひ(青髭) ①ひげのちあが青々として色を塗る。②演劇ひげのそまををしめすため、顔に青色を塗る。あおひょうたん(青瓢箪) (俗) 顔色が青くてあおぶくれ。あおぶくれ(青膨れ) 顔色が青くてむくんでいる。あおぶさ(青房) すもも土俵の東北のすみに、つら屋根からたれた青いふさもと青柱のあった位置。

あおさ(赤コーナ) ノリに似た海藻。あおさのり。食用調味料。アオサ(ペトナムのPeanut長い服) ペトナムの女性の民族衣装。上着は立ちえり、長そで、からだをびつたりと包み、長いすの左右に深いスリット(切れこみ)がある。下にスカパンをはく。

あおだ(田作り) あおだ(しょう) 青大将(あ) ハビの一種。緑色をおだた茶色で、長さメートル近くになる。毒はない。あおだけ(青竹) 青々とした竹。あおたけ。「一踏み(半分)に割た青竹を踏の足裏ツササジ」。

あおざかな(青色) 背が青みがかった銀色で身の赤い。食用のさかな。あおのり(例) アジ、イワシ、サンマ、サバ。

あおたん(青タン、アオタン) も北海道方言(俗) うちみによって「青い魚(あ)」。あおつ(ほ) 「青い魚(あ)」。あおた(一色) ②未熟な感じだ。「一ことを考える(一)株(一)」。あおてんじょう(青天井) ①青空を天井に見立てて言ふことば。野天(あ) ②どまも上がること。「株(一)」。あおな(青菜) 青い菜。なっぱ。●青菜に塩(あ) ものこがまくい。かすしよんほりした。あおにおにさい(青二才) 年が若く、まだ一人前になっていない男(悪口やけんそんの表現として使)。あおによし(青丹よし) (連体) (雅) 奈良(あ)にかるま(あ)のことば。

あおお(あお) ①青い地に白で、設計図や文字などをあわした写真。青図(雅) 青焼き。②計画家。老後の一。

あおのけ(仰のける) (他下) あおむける。あおのり(青海苔) 浅い海でとれる海藻。ほして食用にする。「焼きそば」をした木の葉。②(初夏)の若葉。

あおお(あお) ①青々とした木の葉。②(初夏)の若葉。あおび(かり) 青光り(名・目サ) 青っぽく光ること。「一のするさかな」。あおひ(青髭) ①ひげのちあが青々として色を塗る。②演劇ひげのそまををしめすため、顔に青色を塗る。あおひょうたん(青瓢箪) (俗) 顔色が青くてあおぶくれ。あおぶくれ(青膨れ) 顔色が青くてむくんでいる。あおぶさ(青房) すもも土俵の東北のすみに、つら屋根からたれた青いふさもと青柱のあった位置。

あおび(かり) 青光り(名・目サ) 青っぽく光ること。「一のするさかな」。あおひ(青髭) ①ひげのちあが青々として色を塗る。②演劇ひげのそまををしめすため、顔に青色を塗る。あおひょうたん(青瓢箪) (俗) 顔色が青くてあおぶくれ。あおぶくれ(青膨れ) 顔色が青くてむくんでいる。あおぶさ(青房) すもも土俵の東北のすみに、つら屋根からたれた青いふさもと青柱のあった位置。

あか(紅) ①血や火などの色。あかい。一富士(上) ②簿記など。③赤字。④確定に「だ」。⑤校正。⑥赤字。⑦赤字。⑧を入れる。⑨赤組。⑩白。⑪赤ワイン。⑫白。⑬アカ(俗) 共産主義者。⑭の言ひ方。⑮(園記) ①は、紅(共産主義者)。②は「朱(朱紅色の場合)とも。③(園記) 明かみな。またの。一はじ。④赤の他人。

あか(紅) ①血や火などの色。あかい。一富士(上) ②簿記など。③赤字。④確定に「だ」。⑤校正。⑥赤字。⑦赤字。⑧を入れる。⑨赤組。⑩白。⑪赤ワイン。⑫白。⑬アカ(俗) 共産主義者。⑭の言ひ方。⑮(園記) ①は、紅(共産主義者)。②は「朱(朱紅色の場合)とも。③(園記) 明かみな。またの。一はじ。④赤の他人。

あか(紅) ①血や火などの色。あかい。一富士(上) ②簿記など。③赤字。④確定に「だ」。⑤校正。⑥赤字。⑦赤字。⑧を入れる。⑨赤組。⑩白。⑪赤ワイン。⑫白。⑬アカ(俗) 共産主義者。⑭の言ひ方。⑮(園記) ①は、紅(共産主義者)。②は「朱(朱紅色の場合)とも。③(園記) 明かみな。またの。一はじ。④赤の他人。

あか(紅) ①血や火などの色。あかい。一富士(上) ②簿記など。③赤字。④確定に「だ」。⑤校正。⑥赤字。⑦赤字。⑧を入れる。⑨赤組。⑩白。⑪赤ワイン。⑫白。⑬アカ(俗) 共産主義者。⑭の言ひ方。⑮(園記) ①は、紅(共産主義者)。②は「朱(朱紅色の場合)とも。③(園記) 明かみな。またの。一はじ。④赤の他人。

あか(紅)

あか(紅) ①血や火などの色。あかい。一富士(上) ②簿記など。③赤字。④確定に「だ」。⑤校正。⑥赤字。⑦赤字。⑧を入れる。⑨赤組。⑩白。⑪赤ワイン。⑫白。⑬アカ(俗) 共産主義者。⑭の言ひ方。⑮(園記) ①は、紅(共産主義者)。②は「朱(朱紅色の場合)とも。③(園記) 明かみな。またの。一はじ。④赤の他人。

あか(紅) ①血や火などの色。あかい。一富士(上) ②簿記など。③赤字。④確定に「だ」。⑤校正。⑥赤字。⑦赤字。⑧を入れる。⑨赤組。⑩白。⑪赤ワイン。⑫白。⑬アカ(俗) 共産主義者。⑭の言ひ方。⑮(園記) ①は、紅(共産主義者)。②は「朱(朱紅色の場合)とも。③(園記) 明かみな。またの。一はじ。④赤の他人。

あか(紅) ①血や火などの色。あかい。一富士(上) ②簿記など。③赤字。④確定に「だ」。⑤校正。⑥赤字。⑦赤字。⑧を入れる。⑨赤組。⑩白。⑪赤ワイン。⑫白。⑬アカ(俗) 共産主義者。⑭の言ひ方。⑮(園記) ①は、紅(共産主義者)。②は「朱(朱紅色の場合)とも。③(園記) 明かみな。またの。一はじ。④赤の他人。